審査の結果の要旨

氏名　王　勁

本論文は中国の江南地域を主たる対象として、低湿地域における水のコントロールの歴史的変化を「庭園理水」という観点から明らかにした研究である。従来、庭園史的観点からの理水については一定の研究が蓄積されているが、江南一帯を低湿地域としてとらえ、マクロな水環境を地形的に押さえつつ、現地調査と膨大な文献資料にもとづいて庭園全体の理水を類型的に明らかにしたのは、当該分野の研究上進展において大きな貢献をなしたと評価できる。

論文は全体で７章からなる。序文と結語に割かれた第１章と第７章が論文の本体部分をなす第２章から６章までを挟むかたちで全体が構成されている。

第１章「序文」では、先行研究をふまえた本論の立場を明示する。とりわけ既往研究で曖昧なまま扱われてきた中国「江南」という地域概念は、時代とともに変化してきたことを跡づけ、著者は明清時代の蘇州、松江、常州、鎮江、江寧、杭州、湖州八府とのちの蘇州から分かれた太倉直隷州を文化的・自然地理的観点から「江南」と位置づけることの意義を強調する。すなわち豊富な地下水を湛え、地表面には多様な水系が縫う江南は総じて低湿地域としての特性を共有し、その微細な水の挙動を熟知し巧みに利用したものとして、庭園理水という営為があったとする。江南の地質環境と庭園の立地の関係はきわめて明快であり、ほとんどの有名な庭園都市は著者が提起する江南低湿地域のなかに分布することが説得力あるかたちで示される。このマクロな地形・地質環境と庭園都市との有意な分布関係の指摘は本論文の貢献のひとつである。またこの章では本論で縦横無尽に引用される中国古典文献および絵図の総括が行われており、膨大な資料が博捜されていることが理解できる。

第２章「都市立地と造園活動」は、第１章で提示された地形環境と庭園都市の立地の具体的なケーススタディが展開される部分で、本論の重要な導入部となる。江南は諸山が集まる太湖北岸に立地する無錫と常熟などの山林系都市と、太倉、蘇州などの水系都市に大きく分類することができ、前者は山際の水に隣接した地が選ばれるのに対し、後者は人工的な水系が大きな役割を果たしたことが明らかにされる。

第３章「蘇州の水系変遷と造園」では、宋から元・明を経て清時代にいたるまでの蘇州の都市史と水系の変化、庭園の発達と衰退の歴史的動態が全体として跡づけられる。この章は著者の修士論文の成果をベースにその後に得られた知見などが加えられ充実した内容となっている。

第４章「江南私邸庭園の理水手法」では、マクロの地域から都市スケールを経て庭園スケールへと分析の対象がブレークダウンする。著者は各地方に点在する膨大な数の庭園をすべて対象とし、現地調査を行うとともに、現存しない文献上の庭園の事例も可能なかぎ

り収集して、きわめて独創的な分析を行っている。すなわち庭園の理水について、水源による大分類（地下水・地表水）を行ったうえで、庭園の位置する環境を加味して、A 類（自然水系を利用した庭園）、B 類（都市の人工水系を利用した庭園）、C 類（地下水を利用した庭園）の 3 類型をまず提示し、その細分類として A1～A3、B1～B3、C1 の 7 類型が示される。この庭園理水の類型化は従来かならずしも明示的に設定されたことはなく、漠然とした事例紹介にすぎなかったが、著者の一貫した研究視角によって、ここではじめて論理的明晰性を備えて位置づけられることになった。しかもこの類型が古典文献に登場する理水に関する叙述ともよく一致し、事例研究の過去の蓄積を再整理するという点において、現時点でもっとも妥当な枠組みということができる。

第５章「環境の変化に応じた理水手法の応変」は、上記２～４章の分析結果を具体的事例に即して確認する部分である。滄浪亭、留園、網師園、拙政園、隅園の５庭園の個別事例の歴史的水系環境の変化と庭園側の対応が詳細に述べられている。

第６章「理水手法の時代性と地域性」は理水の共時的、通時的変化をあらためて位置づけ直した章であり、日本における寝殿造庭園の事例やベトナム・フエの事例が参照される。全体として明の A 類、B 類の園林から清の C 類へと推移したことが結論づけられ、この特徴はアジアの他地域とも通じる性格であったことが述べられる。

最終章第７章「結論」では、研究全体を総括し、都市と庭園という二つに分化した研究領域をつないだことに本研究の最大の意義があると結論づけている。

本研究は中国江南地域を対象に蓄積されてきた庭園研究の分厚い成果をもとに、それを都市史の観点から再検討し、大きな地域空間のなかでの水のコントロールと都市・建築・庭園の関係を一貫した視点から明らかにしたという点できわめて重要な研究的達成であると評価できる。資料の収集・分析、論理の展開と叙述、いずれも手堅くまとめられており、当該分野の水準を一段と押し広げる内容となっている。

以上を要するに、本論は庭園史と都市史を連携することに成功した優れた業績であり、当該分野の研究史上大きな貢献を果たしたと評価することができる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。